

学 第26号抜刷 2019年4月

カピル・ラジ著『近代科学のリロケーション
—南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築—』を読む
—「世界史」としての蘭学・洋学研究への視座—

橋 本 真 吾

書評

カピル・ラジ著『近代科学のリロケーション
—南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築—』を読む
—「世界史」としての蘭学・洋学研究への視座—

橋本 真吾

はじめに

本稿は、平成30(2018)年11月洋学史学会例会ミニシンポジウム「蘭学の外側—カピル・ラジ『近代科学のリロケーション』・新居洋子『イエズス会士と普遍の帝国』を読む」と題して開かれたシンポジウムが対象としたカピル・ラジ氏の著書『近代科学のリロケーション—南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築—』(原題：*Relocating Modern Science: Circulation and the Construction of Knowledge in South Asia and Europe, 1650–1900*, Palgrave Macmillan UK, 2007)』(名古屋大学出版会、2016年) (以下、「本書」と略記する) を、評者が、蘭学・洋学を研究する立場から、その意義と有用性について、評者が、蘭学・洋学を研究する立場から、その意義と有用性について検討を試みた論考である。目的は、あくまで蘭学・洋学研究の示唆を追究するものであり、本書の内容自体を論評することにないことを予め断つておきたい。

著者のラジ氏は、科学史を専門としており、デリー大学で修士号を取得後、パリ第1大学で博士号を取得し、現在は、フランス社会科学高等研究院(略称：EHESS)にて教授を務める気鋭の歴史学者である。グローバルヒストリーの一潮流ともされる、「知の交流史」に造詣があり、近年は、本書でも注目している、間文化的な遭遇のプロセスを通した知の構築に力点をおいて研究を進めている⁽¹⁾。ラジ氏は来日経験もあり、2016年に、東京大学東洋文化研究所主催で開かれた「間文化的外交史(intercultural diplomacy)」をテーマとする学会へ参加している。

本書に関する受賞歴などは、管見の限り確認することはできないが、本書は科学をめぐっては歴史・哲学・社会をテーマとする国際学会誌『メタサイエンス(Metascience)』(評者Mark Harrison, 2007)をはじめとする、欧米の歴史地理学会、グローバルヒストリー学会⁽²⁾、『Isis』(シカゴ大学科学史学学会、評者Sujit Sivasundaram, 2008)などの雑誌で取り上げられ、2007年の出

版当初から科学史を中心に広範囲に注目を集めた書籍であったといえる。日本においては、2016年に水谷智氏・水井万里子氏・大澤広晃氏の三氏による翻訳本が出版された。以降、全国紙の書評欄⁽³⁾、図書紹介の専門誌⁽⁴⁾で注目され、学会誌では化学史学会（2017年9月）、西洋史学会（2018年6月）の雑誌にて書評論文⁽⁵⁾の掲載が確認される。最も新しいところで、今回洋学史学会が取り上げるところとなった。

それでは、本書の章立てを紹介しよう。

序章

第1章 外科医、行者、商人、そして職人—近世南アジアにおけるラン

ファキール
ブルールの『オリシャの庭園』の制作（2005年）

第2章 循環と近代的地図作成法の出現—イギリスと初期植民地イン

ド、1764–1820年（2003年）

第3章 洗練性の再創造、信用の構築—ウイリアム・ジョーンズ、印

ンド人仲介者、そして18世紀後半のベンガルにおける信頼度の高

い法知識の創出（2001年）

第4章 19世紀初頭におけるイギリスの東洋学、もしくはグローバリ

スピリティ
ズム対普遍主義

第5章 普及論を打破する—19世紀初期ベンガルにおける近代科学教育

の制度化

第6章 旅人が機器になるとき—英領期の南アジア人による19世紀の中

央アジア探検（2002年）

終章

謝辞／訳者あとがき／注／参考文献／図版一覧／索引⁽⁶⁾

章立てからも、本書が扱う時代や多種多様な対象をうかがうことができよう。翻訳本の内容紹介については既に上記した学会誌に書かれているためそれらに譲ることとし、次に述べる内田麻理香氏の書評を元に論点を見出していきたいと思う。

内田氏によれば、本書は、「西洋と非西洋の対立という、単純な二分法から逃れた新鮮な立ち位置を示」し、東と西、あるいはアジアとヨーロッパという二項対立的枠組みへの再考の可能性を示唆しているとされる。たしかにラジ氏は「序章」にて、従来までの科学史の議論とその問題点を述べる際に、事実認定のような方法から問い合わせ直すような方法を批判し、むしろ、方法論的にグローバルな連関や運動、もつといえれば互酬性（reciprocity）こそが科学

誕生においての本来の立役者であると繰り返し述べている。こうしたラジ氏の提案は、蘭学・洋学研究に対して何かヒントを与えてくれるかもしれない。

そこで本稿では、このような本書のもつ可能性を前向きに受容しつつ、「アジア対ヨーロッパ」というフレームを超えた、蘭学・洋学研究にとってのグローバル空間を想定するための視点を積極的に探究していきたいと考えている。

ラジ氏の提案をより鮮明にするために、とりわけ次の2点を対象に絞りたい。

まず、注目するのは本書でラジ氏が駆使する用語である。本書では全体を通していくつかのキーワードが、種々ある対象を有機的な関係に結ぶ重要な役割を果たしている。たとえば、「協業（cooperation）」、「循環（circulation）」、「接触領域（contact zones）」など、「間文化的な遭遇（intercultural encounter）」がそれである。これらの用語は、別々の文化圏の人々による相互交流を評価する際にたびたび登場する。訳者一人である水井氏の解説によれば、本書に使われている用語の一部は、近年の帝国史研究や植民地史研究、ポストコロニアル・スタディーズの中で特に異なる文化の橋渡しに携わった人物の日記や体験を綴った伝記類などを対象にした、人類学の研究から示唆を得ているとされる⁽⁷⁾。したがって、ラジ氏は学際的な知識を駆使した新たなアプローチを導入し、従来の科学史を転換しようと試みていることが理解される。このようなアプローチが蘭学・洋学史研究にどのような示唆を与えるのか、具体的なケースを想定しつつ検討してみたい。

もう一点は、「仲介者」が果たした役割に関する評価である。仲介者の役割については、従来の見方では、先進的な欧米の近代科学に対してアジアの後進性という、ヨーロッパ側とアジア側の非対称性を強調する枠組みを前提にして考えられてきた。後述するが、ラジ氏はインドにいた現地仲介者が自ら率先して参加し、プロジェクトを実施したヨーロッパ側の様々な達成と比しても、全く本質的な役割を担っていたという評価をしている。仲介者が知の生成に参加する際にどのような積極性があったのかという点は、蘭学・洋学を日本の科学とヨーロッパ科学との交流史とみると、一つの興味深い論点となるであろう。後述するが、こうした論点は蘭学・洋学研究においてまだまだ研究が進められていない領域であり、今後新領域を生み出す可能性を秘めていると考えられる。

本稿ではまず以上の点をめぐるラジ氏の議論を整理した上で、蘭学・洋学研究への展望を考察していきたい。

1. 用語をめぐる一考察

本書は、17世紀から19世紀にかけてインドを中心とした南アジア地域における科学知の生成について扱った歴史書としてかかれている。その対象は植物誌、地理学、行政学、東洋学、教育（人材育成）、地誌学によぶ。

本書がカバーする領域は対象としてみると非常に幅広いことになるが、これらを一つのまとまりとしてつなぎとめる役割を果たすのが、いくつかの重要なターム（用語）である。とりわけ序章にてラジ氏が強調した用語に「間文化的な遭遇」がある。本書で核となる用語の一つである。

この用語は「異文化間の出会いの中で複雑な歴史的出来事および発見の契機になるもの」であるとラジ氏は述べており、科学的知識ないし実践知が生み出される過程で、間文化的な遭遇が果たした役割を再検討するべきであると提案している。様々な主体が相互に影響を与え合う関係自体に価値をおこうとする試みで、ラジ氏の歴史叙述におけるオリジナリティーはここにあるといえよう。

ここでラジ氏の論証の特徴を考えたい。本書の「序章」を整理すると、特徴は大きく分けて3つあると考えられる。

1つ目は、ラジ氏の先行研究に対する問題意識である。氏は、インドすなわち「非ヨーロッパの近代空間における知の生産については、知的伝統に関する社会史的研究によっては探求されておらず、もっぱら人類学者とその他の地域研究専門家に任されてきた」（7頁）と指摘する。つまり、非ヨーロッパ圏の知の生産は、ヨーロッパのそれと区別され、単にローカルなものとして矮小化された存在とでも言うべき対象となってしまっていると嘆いているのである。このような見方こそ西洋中心主義的な言説であり、ラジ氏が長年奮闘して克服しようとしてきたものであった。氏はそのような言説を克服するべく、後述の通り、ラジ氏は、様々な社会科学分野の研究成果を活用することで、ユニークかつ説得的な議論を開拓することに成功する。

2つ目は、「科学」の定義にある。ラジ氏は、近年の科学研究が、科学あるいは科学的活動を「知の生産のみならず、そのために使用される道具、技術、サービスの生産をも指すものとして捉え」といることを紹介し、それらに賛意を示している（同）。それゆえに氏は、「科学とは真実や合理性という根源的な価値観が具現したものであり、道徳的・社会的・物質的進歩の原動力であり、文明そのものの目印である、という信念」を共有する言説⁽⁸⁾を退けるのである。氏のいう、「実践知をめぐる最近の研究が、多分にプラグマティックな背景をもつものが多い」（6頁）とは、知それ自体に価値を求めるよりも、

その生成される過程こそが知の本質的な性格を決めているという主張である。だからこそ、本書では科学の定義について、その生成過程、すなわちどのような状況で誰が、どのように知を生んだのかにこそ焦点を当てるべきである、と氏は主張するのである。したがって、本書のタイトルである「リロケーション」とは、このような知の生成における価値付けの配置転換を意図する言葉であると理解できる。

3つ目は、世界史の枠組みで書かれる叙述法である。ラジ氏は本書にて、「ヨーロッパ拡大の文脈のなかでグローバル化された近世空間における、科学知の生産の本質を再検討する」と対象を捉える範囲について言及している（7頁）。「グローバル化された近世空間」とは、対象の背景的世界に国や地域といった単一的な空間を設けず、各主体（agent）がそれぞれに影響を与えることを前提とした、世界史的な思考の枠組みを設けることを意味するものと考えられる⁽⁹⁾。このような叙述スタイルは、昨今欧米系歴史研究で盛んである「文化交渉史」ないし「グローバルヒストリー」に近いものと考えられる。こうしたスタイルを採用した理由には、ラジ氏が本書で主張したいこと、すなわち知の生成をめぐる相互関係のあり方を論証する上で、このようなフレームワークが合致するからにはかならない⁽¹⁰⁾。

これら3つの特徴が「序章」でラジ氏が展開する理論的フレームワークであるが、話を用語に戻せば、種々の対象と目的意識をつなげる上で、「間文化的な遭遇」は重要な意義をもつとされる。

それでは、ラジ氏が想定する「間文化的な遭遇」とはどのようなものなのであろうか。「序章」を読み進めると氏はさらに別の言葉を加えて、「科学を構成する専門化された知の循環において間文化的な遭遇が果たす役割」と発展させて述べている。（同）本書では、この「遭遇」は「十七世紀後半から十九世紀後半にかけてのひとつの間文化的な『接触領域』（中略）に關係する歴史的記録を検証することによって探究される」と述べられている（7頁）。つまりこの一節は、「接触領域」が「間文化的な遭遇」の発生現場なのだ、ということを示す一文であろう。ここではじめて「接触領域」という用語が登場するが、ラジ氏はどのような意味で用いているのであろうか。

「接触領域」という概念は、『帝国のまなざし』（英題：*Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, 1992）の著者で社会言語学者のマアリー＝ルイーズ＝プラット（Mary Louise Pratt）氏によって1990年代初頭に創出された言葉とされる。今日では文化人類学で、すでにこの概念が「フロンティア（未開拓地）」とほぼ同義語として使われ、定着したことが指摘されている⁽¹¹⁾。

ラジ氏自身は、「異なる文化的・地理的出自と歴史をもった人々が出会い、関係を確立する場——『強制、根本的不平等、解決の難しい紛争を通常ともなう』——を指示す便利な方法」と規定している⁽¹²⁾。ラジ氏はこの用語を使うことで、科学知の生成が行われる場として従来の実験室などの閉じられた空間ではなく「屋外（open air）⁽¹³⁾」への転換を促していると考えられる。したがって、「接触領域」とは、「間文化的な遭遇」を見出すための要件を備えた歴史的な現場を表現する、最も適切な用語であるとラジ氏が考えたと思われる。

それでは、接触領域と呼ばれる場は具体的に、どのようなことが行われていたのであろうか。

ラジ氏は、インドおよびヨーロッパ両側の「仲介者」の存在が「接触領域」で活躍し、互いに「協業」する主体として想定している。後述するが、「仲介者」とは、本書の中で「接触領域」にてヨーロッパと南アジアとの両側を何らかの理由ないし目的で、往来する人物たちのことである。ラジ氏の叙述の中では、ヨーロッパ側の科学的活動（実践）にインド側の仲介者が活発な参加者として関わったとされている。

「接触領域」に関わる描写は、各章にわたって展開されるが、一例として知識生産における洗練性と信用に焦点を当てた第三章を紹介したい。イギリス人でベンガル政府にて勤務した、後に法学者として有名になるウィリアム・ジョーンズ（William Jones, 1746–1794）は、司法の安定化をはかるべく、現地の知識人（パンディットとマウラヴィー）を仲介者として雇い翻訳事業や業務監督を担わせる。ウィリアム・ジョーンズは現地人が行う翻訳に対して、「現地人によるもの」として洗練性（civility）を認め、信用をおいたとされる。ラジ氏の分析によれば、新しい行政知識が創造される中で、イギリス側とインド側の洗練性が均衡を保ちつつ成型されていったとされる。ラジ氏の結論は、統治を行うイギリスと支配を受けるインドの知識人という非対称性を認めつつ、「接触領域」における現地知識人の積極的な参加についても評価すべきであるとするものである⁽¹⁴⁾。

興味深い点として同章では、南アジアにおける接触領域で生成された知が、ウィリアム・ジョーンズのようにイギリスへ帰国後活躍する人物によってヨーロッパへと流入され、ヨーロッパでの科学的活動に影響を与えていた点について指摘している。知の環流についての言及である。そして最後にラジ氏は、南アジアとヨーロッパの間における接触領域での協業から、知の「循環」がおこなわれる制度が、徐々に形成されていったのである、と相互の影響関係が制度化された点を指摘している。「間文化的な遭遇」が知の生成に

対してどのような意義をもつかが、本書ではこのようにして論究されているのである。

ここまでラジ氏の論証過程を追ったところで、蘭学・洋学研究と対比させて考えたい。

まず、蘭学・洋学の知の生成における「接触領域」とはどこに当たるのだろうか⁽¹⁵⁾。ラジ氏に倣うならば、「ヨーロッパ拡大の文脈のなかでグローバル化された近世空間」という同じ文脈で近世日本の「接触領域」を考える必要がある。

たとえば、近世日本がヨーロッパのみならず中国も含めた文化の異なる異国と接点をもった場所という意味において、長崎（オランダ・中国）、薩摩（琉球）、松前（ロシア）、対馬（朝鮮半島）、すなわち近世日本の外交口のいわゆる「四つの口」が容易に想起されよう。特に文化的側面での外国との接点については、近年、紀伊半島を世界史の流れから捉えようとする研究もみられる⁽¹⁶⁾。研究対象の幅がかつてより広がりのあることが注目されよう。

まず知の生成という観点から、日本の「接触領域」での営みには、蘭学がある。そしてまた、幕末期にかけてオランダ語以外の言語も含めて展開する、洋学がある。

蘭学は元々、オランダ人が持ち込む文物に興味をもった日本人が、好奇心から考究する目的で始められたものであった。吉田忠氏もいうように、一つの契機となった出来事は、前野良沢、杉田玄白らによる医学書『解体新書』の完訳（安永3 [1774] 年）に代表される、翻訳事業である⁽¹⁷⁾。こうした翻訳が生成した知は、医学をはじめ、天文学、暦学、自然哲学、物理学におよんだが、その元は西洋からの学問であった。しかし、今日研究者が蘭学・洋学という場合、単なる西洋学問の受容という意味では用いられない。なぜなら、地域に根ざした在来の学問と西洋学問との折衝の上で成立した学問であり、西洋学問を日本人のまなざしから捉え、受容し、発展させてきた一つの学問（discipline）であると考えられて来たからである。とりわけ翻訳について言えば、蘭学・洋学では漢語と日本語、すなわち日本人が用いた言語に置き換えられた点は、重要である。蘭学・洋学の知の生成および知の成立については、紙幅上詳述することは難しいが、これまで多くの蓄積があり諸外国の科学的知識と比較した研究も、かなりある⁽¹⁸⁾。

しかし、ラジ氏の研究と比較するとどうであろうか。日本史を中心とする学界が扱ってきたことにも由来するであろうが、蘭学や洋学という対象を研究する際に、その叙述法としては一国史、あるいは比較史⁽¹⁹⁾を採用することが、より一般的であったと思われる。つまり、西洋知識の受容と発展の先に

繋がるもののが何であるかという点に対する問い合わせ、日本史の文脈（例えば「日本の近代化への貢献」など）に落とし込むことまではやっても、世界史のそれには行わないことがしばしばではなかろうか⁽²⁰⁾。

こうした現状に対して松方冬子氏は、2015年に本紙へ寄稿したアダム・クルーロー氏の新著についての書評論文にて、「日本人のための日本史のためではなく、世界人類の世界史のために、日本史学にできることは多いはずである⁽²¹⁾」と述べており注目すべきであろう。論稿の中で松方氏は、「とくに、法制史や外交史に関しては」と分野を限って言及しているが、日本史研究に従事する研究者にとって、研究対象とされるべきものは何なのか再考を促す意味で示唆的な一文であろう。

国内史的なミクロな議論もあれば、世界史的なマクロな議論も、両方あってよいという考え方もあり立つのも事実である。歴史学に限らず、学問が提供する物の見方は、常に相対的であって、ミクロもマクロも両立可能というのが、本来の姿であろう。しかしながら殊に日本史学においては、伝統ともいえる、「国史」「東洋史」「西洋史」という分業体制が影響したことなのか定かではないにせよ、今後は分野の垣根を超えていくような、挑戦的な研究も必要ではないだろうか。

既に、八百啓介氏によって蘭学・洋学研究を世界史的に位置づける野心的ともいえる研究もある⁽²²⁾。他の国の史料を読む際の言語的な障壁などの困難が伴うものではあるが、松方氏や八百氏の問題意識が公に出され、そして、それに基づいた新たな研究がなされることを、歓迎すべきと思う。本稿でも進んでこの問題について考えたい。

そこで、いま「蘭学・洋学研究の世界史化⁽²³⁾」という問題に取り組むのであれば、ラジ氏の利用した用語を参考にすることは、有用と思われる。評者は、ラジ氏が本書で繰り返し用いている、「協業」と「循環」という視点を導入することで、課題解決の糸口は開かれると考えている。

近世日本での外国との文化交渉における「協業」を考えると、医学、植物学、地理学、さらには「オランダ風説書」、辞書編纂、航海、軍隊創設など様々なトピックが想起されよう。これらのテーマの中心的な存在は、やはり「仲介者」としての通訳や蘭学者など、蘭学・洋学を培った人物たちである。

幕末期にかけては複数の地で港も開かれ、それまでにあった「接触領域」はより拡大していった。幕府や欧米各国の国家・外交政策も絡まり、「仲介者」同士の「協業」の業態も、その在り方も様変わりしていったことはつとに想像されるところである⁽²⁴⁾。「接触領域」が広がれば、そこに新たな「仲介者」が生まれ、知が育まれる。清朝からの中国人も、欧米諸国から来る西洋人も、

「接触領域」で折衝を担当し、「協業」した者たちは通訳たちであり、その知識を発展させたのが知識人たる蘭学者であった。このように日本近世における知の生成を世界史的に捉えるならば、日本側の仲介者の様子を調べた、蘭学・洋学研究の蓄積が必要になってくる。

もちろん、他分野の専門用語を便宜性が高いからと安易に用いることについては慎重になければならない。「ヨーロッパ言語で語る歴史学だけでは、世界の見方がどうしても偏ってしまう」という指摘⁽²⁵⁾もあるが、言葉・概念の場合は、その背景についても整理し理解した上で用いなければいけない。とはいえ、本節で述べてきたように、世界史的枠組みの中で蘭学・洋学が理解される取り組みが進むのであれば、今後新たに発見される「接触領域」が増える可能性は大いにあるといえよう。

「日本の日本史研究は、ヨーロッパ側の史料に対抗できるだけの史料群と研究者層を要する稀有な例⁽²⁶⁾」であるとされる。これまでの豊富な研究成果を活かすべく、問題意識を共有する研究者同士が「協業」し、取り組むべき課題といえる。

2. 「仲介者」の役割への評価—主体性の評価をめぐって

本節では、「仲介者」に焦点を当て、ラジ氏の議論を参照しつつ比較の中から蘭学・洋学における「仲介者」の特徴について考察することを試みる。

本書を通して、ラジ氏は一貫してインド側の「仲介者」の主体性や、積極性について言及している。たとえば先述した「第三章」の例でも指摘したように、植民地統治していたイギリス側の命令の下で行われた翻訳事業や監督事業において、氏は非対称性を認めつつもインド側の知識人の参加を、積極的であったと論じている。

ラジ氏の論調の背景には、次に示すように、植民地が単なるヨーロッパ人の実験場であったとする言説を反論するねらいがあった。

（中略）南アジアが、ヨーロッパの知を単純に応用する空間でも、ヨーロッパの大都市において処理される多彩な情報の広大な収集場所でもなかったこと、さらに、「インド人によって創られたものの、ヨーロッパ人によって体系化・伝達された複雑な知」の現場でもなかったということを例証しようとしている。（9頁）

ヨーロッパ側と対等ではなかったにせよ、「新たな知の秩序への活発な参

加者」(同)であった南アジアの仲介者の果たした役割、これこそラジ氏が本書で描こうと試みたグローバル化した近世空間における知の生成の新たな実像であったといえる。

こうした「接触領域」における「仲介者」の実像を再定義することで、ラジ氏はもう一つ科学をめぐる広く信じられている考えに対する反駁を試みている。それは、科学とは「すべての文化に共通の現象」であり、「その論理に説得力があるがために、科学的概念の伝達を問題なく進むものとして理解する考え方」である(169頁)。氏は「ある共同体の伝統的な知のイメージは、(中略)別の伝統において定式化された科学的言説を把握する仕方に実際に影響を与えるのであり、受容する側の文化で結果として起こる科学的実践は、元の文化のものとは幾分違うのだ」と述べ、単純な科学的知識の普及論に対してアンチテーゼを立てる形で異議を唱えている(同)(27)。

科学的知識の普及論に対する反論に、なぜ「仲介者」が関連するのであるか。

ラジ氏は意外にも、「仲介者」の自己形成がかかわっている点を指摘する。ここで氏は、南アジアでのイギリス植民地時代に建てられた大学「ヒンドゥー・カレッジ」(1816年創設)のカリキュラムデザインに、ベンガル人エリートたちが深く関与している事例を紹介している(156頁)。そこで詳細に述べられたことは、カリキュラムデザインについての論争であり、宗教、言語、文学、科学について協議し決めた設けるべきカリキュラムこそが、ベンガル人エリートたちの「知のイメージ」であった、と氏は強調する。

仲介者の自己形成について、ラジ氏はその「プロセスのひとつの側面が、とりわけ知的エリート（仲介者——評者注）にとっては、ある種の知の理想的定義化を意味しているのだ」と提案をしている（155頁）。そしてこれらの理想を、氏は「知のイメージ」と呼んでいる。「仲介者」が「知のイメージ」を主体的に選ぶ存在であることを前提におくことで、知の生成における「仲介者」の積極性を説明しようとするのが、ラジ氏の科学知をめぐる「受け身一方」論の普及論への反論といえよう。

ラジ氏の南アジアの事例を踏まえた上で、蘭学・洋学研究との対比を考えるならば、蘭学者の主体性、積極性について考えてみよう。氏の枠組みに倣い、仲介者である蘭学者の「知のイメージ」の変遷と、「新たな知の秩序」への参加姿勢について関わる出来事を紹介しながら、ラジ氏の叙述と比較しながら検討してみたい。

蘭学における知の生成は、歴史上、大きく2つの結節点があったされる⁽²⁸⁾。一つ目は、安永3(1774)年の杉田玄白や前野良沢らによる『解体新書』の翻

訳事業、二つ目に、アヘン戦争（1839-1842）を契機とする幕末期の軍事科学技術の勃興が考えられるとされる⁽²⁹⁾。蘭書の翻訳とアヘン戦争は、いずれもその当時の蘭学者たちの「知のイメージ」を象徴する、画期となる出来事といえよう。

このような従来の見方に加えて、近年の研究成果では時代区分に関して注目すべき事例が他にもあることを示唆している⁽³⁰⁾。

蛮書和解御用はその後、宇田川榛斎や青地林宗、小関三英⁽⁵³⁾に宇田川裕菴、箕作阮甫などの蘭学者を輩出し、海外の学問や情報を扱う中心的役割を担う機関へとなっていく。そして最後は文字通り、開成所、その後の東京大学へと成る系譜がそこに刻まれているのである。幕末期になると徐々に蘭学から洋学へのシフトが起こり、それが明治期以降の学問の主流へとなっていくことを考えると、フェートン号事件後の大槻玄沢の働きかけは蘭学者の「知のイメージ」を象徴する、蘭学史における結節点の一つと呼べるものであろう。

これをラジ氏の叙述に倣って述べれば、旧来よりおこなわれた官学である儒学の外に蘭学を加えるという事業、すなわち「新しい知の秩序」を創出する役割を果たしたと評価することもできよう⁽³⁴⁾。

これまで、ラジ氏が本書で展開した「仲介者」の働きを敷衍し、南アジアのベンガル人エリートとフェートン号事件後の蘭学者の比較を試みた。ラジ氏の主体性にかかる議論は、植民地統治という時代の制約もあり、史料上の課題などまだ克服されなければならないものがある⁽³⁵⁾。一方の大槻玄沢の議論についても、より広い視野から（それこそ世界史的枠組みの中で）の検討が必要になるであろう。

しかし、仲介者の動きから「知のイメージ」、「新しい知の秩序への参加」を示す事実を取り上げ、彼らの自主性・積極性を評価するラジ氏の議論は、先述した一方向的な知の普及論に対する批判的かつ有効なオルタナティヴを提示したといえよう。このような視点から、蘭学への示唆も考えることができる。

これまでの蘭学・洋学研究は、日本の近代化との接点で語られることが多い。

かったことは争えない⁽³⁶⁾。考えてみれば、江戸時代にほぼ並行して盛んになった国学に比べて蘭学は、明治時代以降の西洋学問の輸入による日本の近代学問の祖型のようにして語られることもしばしばである。

確かに物語を充実するのであれば、できるだけ充実させる方がいいに越したことはない。しかし、それを続けていて歴史学として現代に向き合っているといえるのであろうか。

蘭学はなぜ生まれ、なぜ人々に受け容れられ、なぜ継続され発展し、なぜ近代以降も受け継がれていくことができたのだろうか。はたまた、一体なぜ日本で起こったのであろうか。

「日本の近代化」というテーゼだけに収束できない蘭学・洋学をめぐるこれらの問いに答えるには、各時代の仲介者たちの「知のイメージ」や「新たな知の秩序への参加」という、ラジ氏が論じた切り口が役に立つかもしれない。

おわりに

本稿では2つの節をもうけ、ラジ氏の著書で展開されたヨーロッパと南アジアにおける知の生成に関する議論から、蘭学・洋学研究への示唆を探究し、その適用範囲を検討してきた。最後に、今回のシンポジウムのテーマでもあった「蘭学の外側」を考えることが、蘭学・洋学研究にとってどのような意義があるかを、パネリストとして参加した評者の考えを交えつつ述べてみたい。

「蘭学の外側」を考えるということは、「蘭学」というフレームの外側を考えることで、実のところ、間接的に「蘭学」を考えることに等しいということである。本稿での「外側」は、南アジアとヨーロッパ（主にフランスとイギリス）であり、「内側」にあったのは蘭学であった。これら内と外は、「蘭学」と「蘭学でないもの」という全体を表している。全体像が徐々に明るみにさらされてくるにつれて、一つの現象ないし出来事を、別の国、地域、あるいはグローバルな空間の中での相互関係として捉えることが、初めて可能になると言っても過言ではない。

具体的にいえば、蘭学・洋学研究は、その多くの場合「日本史」として研究され、そのフレームの中で定義付けなどがされてきたわけであるが、「外側」に目を移すことで、旧来までは関連性がないとみなされ顧みられなかつたことが、思いがけない発見につながる可能性もある。このことは、ラジ氏が本書を通して示してきた、異分野からの用語や概念を用いることでも同じことが十分に起こりうるのである。

このように眺めたときに考えられる本書の有用性は、対象の視野を広げることのみならず、グローバル空間を対象とした社会科学における新たな研究視点を見つける、いわば「手引き書」の役割を果たしてくれることにあるといえるであろう。

最後にまとめれば、「蘭学の外側」を考えることは、新たな「接触領域」、すなわち新たな研究フロンティアを提示することへと繋がるといえる。知の受容史から、グローバルな知の「循環」史へ、蘭学・洋学研究を世界史的な間文化的な知の生産の歴史へと「リロケート（再配置）」するための多くのヒントが、本書から見出されることであろう。

（付記）本稿は、2018年11月洋学史学会例会における口頭発表を土台にしており、同例会における水谷智氏、水井万里子氏、新居洋子氏、松方冬子氏、阿曾歩氏のコメントにも負っている。記して謝意を表する。

註

- (1) Palgrave Macmillanウェブサイトより。(2018年11月3日時点)
- (2) *Annales* (Serge Gruzinski, 2006), *The British Journal for the History of Science*, *Journal of Historical Geography* (Charles Withers, 2007), *Journal of Global History* (Tirthankar Roy, 2008), *Conservation & Society* (John Mathew, 2008)などがある。
- (3) 内田麻理香・評「近代科学のリロケーション—南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築=カピル・ラジ著」『毎日新聞』(2016.8.28朝刊)、および中村和恵・評「近代科学のリロケーション」『朝日新聞』(2016.10.9朝刊)
- (4) 坂野徹・評『図書新聞(3284)』(2016.12.24)増田耕一・評『みすず(656)』1月・2月合併号(2017年)など。
- (5) 柏木清吾「カピル・ラジ『近代科学のリロケーション：南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築』」化学史学会『化学史研究』第44巻第3号、2017年16-19頁、および水野祥子「書評」「近代科学のリロケーション—南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築—」日本西洋史学会編『西洋史学(265)』日本西洋史学会、2018年59-61頁参照。
- (6) ()は学術雑誌に掲載された初出年(記載のないものは本書オリジナル)。
- (7) Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge, 1992. が初出とされる。2018年11月3日に開かれた、洋学史学会ミニシンポジウムで同席したパネ

- リストの水井万里子氏からの教示による。
- (8) 本書ではその冒頭にて、近代科学の西洋固有起源・文化的普遍性をあげたジョセフ・ニーダムや、科学は西ヨーロッパからその外部へと普及するとするモデルを打ち立てたジョージ・バサラがそのような価値観を表した研究者の典型として挙げられている。本書1-3頁。
 - (9) ラジ氏は「グローバル化された近世空間」を設定するためにも、対置されるローカル空間の研究、すなわち「人類学者とその他の地域研究専門家」によって明らかにされてきたことが必要であるという認識のもとで、より発展的で論争的なテーマへと結びつけるという手法をとる。
 - (10) ラジ氏があげている先行研究の事例やその分野の専門家の名前をみると、リンダ・コリー氏（プリンストン大学）など、グローバルヒストリーの分野で知られる研究者の名前があげられており、氏によって十分に意識された上で本書が書かれていることを確認することができる。
(215頁)
 - (11) 田中雅一（2007）前掲参照。文化人類学の研究者のあいだでは、多義性を考慮したせいもあって、「接触領域」という漢字による訳語は用いず「コンタクト・ゾーン」とカタカナ表記を用いるようである。
 - (12) 注（序章）39頁。ちなみに、原著では次のような説明書きがされている。“Contact zones’ are social spaces where disparate cultures meet, clash, and grapple with each other, often in highly asymmetrical relations of domination and subordination.” (p.6) また、プラット氏の指摘では、接触領域では「トランスクカルチュレーション（transculturation）」と呼ばれる現象が生じるとされている。この現象について、田中雅一の解説によれば、「コンタクト・ゾーンにおいて、他者はたんなる風景や生態系の一部でも、征服され搾取される犠牲者でもない。他者は、われわれを異化し、『省察的他者』として発見されなければならない」とされている。田中雅一「コンタクト・ゾーンの文化人類学誌へ：『帝国のまなざし』を読む」「コンタクト・ゾーン=Contact zone (1)」京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター、2007年、36頁。
 - (13) フランス人社会学者のミシェル・カロン（Michel Callon）によって提唱された「屋外科学（open air sciences）」に依拠したものされる。
 - (14) 「接触領域」は用語として便利とはいえ、それに付随する問題がないわけではない。どの地域であれ、接触領域とされる場所の歴史資料の量はヨーロッパ系のものが多いことは想像に難くない。ラジ氏の主張の妥当性や是非について論じることは本稿の目的ではないにせよ、ヨー

- ロッパ側の史料に基づいた説明に偏らず、今後はもう一方のインド側の態度を示すような資料が提示され、実証的に論証されることを期待したい。また、本注も、シンポジウムの中での水井氏からの貴重な教示によるところである。
- (15) ちなみに蘭学・洋学研究において、「接触領域」という用語が用いられたことは、管見の限りはない。
 - (16) 村井草介監修、海津一朗・稻生淳共編『世界史とつながる日本史 紀伊半島からの視座』ミネルヴァ書房、2018年参照。
 - (17) 吉田忠編『東アジアの科学』勁草書房、1982年「序文」ii。
 - (18) 代表的なものに古島敏雄・安芸皎一校注『日本思想体系 62 近世科学思想 上』（岩波書店、1972年）および広瀬秀雄・中山茂・大塚節雄校注『日本思想体系 63 近世科学思想 下』（岩波書店、1971年）、広瀬秀雄・中山茂・小川鼎三校注『日本思想体系 65 洋学 下』（岩波書店、1972年）。本稿ではとりわけ、中山茂「近代科学と洋学」、小川鼎三「近代医学の先駆—解体新書と遁花秘訣—」（共に『日本思想体系 65』）を参考にした。
 - (19) 比較史とは一般に、異なる国ないし地域の互いに類似した歴史事象（例えば「革命」、「科学」）を比較することを通じて、それぞれの特殊性と相互の共通性とを明らかにする研究方法とされる。一方のグローバルヒストリーでは、ある歴史事象を影響関係から描き出すことを通じて、物語的な歴史叙述を志向する方法とされる。ラジ氏が本書で採っている叙述方法は、後者であることが理解されよう。
 - (20) 蘭学・洋学研究において、近年最も多く出されたテーマの一つに情報史研究がある。しかし、この「情報史」も、結局のところ国内的受容と発展で議論される場合が多い。この日本の情報史研究の多くが国内での（若木太一編『長崎・東西文化交渉史の舞台』勉誠出版、2013年、196頁参照）がある（阿曾歩氏の教示に負う）。
 - (21) 松方冬子「書評 Adam Clulow, *The Company and the Shogun: The Dutch Encounter with Tokugawa Japan*」『洋学 (23)』、2015年、140頁。
 - (22) 八百氏は、「貿易」と「蘭学」をより精緻に関連させて論じることで、蘭学研究を世界史へと広げる可能性を吟味している。八百啓介「世界史としての蘭学研究の可能性」『洋学 (21)』2013年参照。
 - (23) 「…の世界史化」は熟れない表現ではあるが、本稿では、前述の松方氏

- の言葉を借りて「世界人類の世界史のため」の叙述法を採用すること、と定義しておきたい。
- (24) 幕末の日本人と外国人との間の「協業」の様子について、絵と記事で伝えたものに、金井圓訳編『描かれた幕末明治—イラストレイテッド・ロンドン・ニュース日本通信一八五三—一九〇二』(雄松堂書店、1973年)がある。
 - (25) 松方前掲(2015)。
 - (26) 松方前掲。
 - (27) 本書第五章参照。この章では、カルカッタのヒンドゥー・カレッジをめぐって、ヨーロッパ学問とインド人エリート層のアンデンティティ形成が論じられている。副題は「普及論を打破する(Defusing Diffusionism)」。ラジ氏は、普及を「受動的な概念」と述べている。(155頁)
 - (28) 蘭学の時代区分については、吉田氏の他にも沓澤宣賢氏が、17世紀前半から「草創期」、18世紀後半から19世紀にかけて「勃興期」、文化・文政期以降を「幕末期」と整理している。沓澤宣賢「洋学の展開」村上直編『日本近世史研究事典』東京堂出版、1989年参照。
 - (29) 吉田忠(1982)前掲ii。
 - (30) 蘭学史における他の結節点を考える上で、キリスト教へのアプローチ、物理学・化学への関心、シーボルトとの協業、社会科学書の普及、そして事件としての蛮社の獄など整理・検討しなければならない課題はある。本稿では、仲介者の主体性に焦点をあてる都合、後述する幕府天文方蛮書和解御用の創設が好例であると考えた。
 - (31) 日本側の経緯について詳しい近年の研究に、松本英治氏の『近世後期の対外政策と軍事・情報』(吉川弘文館、2016年)がある。またイギリスの東アジア拡大という文脈では宮地正人『幕末維新期の社会的政治史研究』(岩波書店、1999年 [=2015年より岩波オンデマンドブックス])のも参考になる文献といえる。
 - (32) 松本英治前掲(2016)参照。上野晶子「江戸幕府の編纂事業における『厚生新編』と蘭学の『公学』化」松方冬子編『日蘭関係をよみとく 上巻つなぐ人々』思文閣出版、2016年も参照。
 - (33) 特に青地林宗と小関三英に共通する点として、世界各国にまつわる情勢や歴史を扱った地理書、すなわち社会科学系書籍の翻訳があった。こうした書物から、たとえばアメリカ合衆国などの情報も日本に流入しはじめ、結果として知識人たちの社会思想に影響を及ぼしたことを

拙稿で指摘した。拙稿「近世後期における対米観の形成—大槻玄沢から箕作省吾『坤輿図識』まで—」『洋学(25)』2018年参照。

- (34) 国学者の本居宣長(1730-1801)でさえ、その晩年に著した隨筆『玉勝間』(1795-1812)の「七の巻」にて、「おらんだといふ國の学び」と題する節を設け論じている。当時の新學問として、注目度が示唆されよう。村岡典嗣校訂『玉勝間(上)』岩波書店、1934年274-275頁。
- (35) ラジ氏の議論には、史料的制約からヨーロッパ側の史料に偏っているため、結論の評価が難しい面がある。
- (36) たとえば八百啓介前掲(2013)34頁。

はしもと しんご(東京工業大学大学院
社会理工学研究科価値システム専攻博士課程)

論文受付日2019年1月8日 掲載許可日2019年1月20日

Brand-new Contact Zones: a Constructive Reflection on the Historiography of *Rangaku/Yōgaku* to be Written as World History with the help of *Relocating Modern Science* (2007) by Kapil Raj

Shingo HASHIMOTO

Keywords

Contact Zones, Intercultural Encounter, History of Science, Circulation of Knowledge

This paper discusses the potential of Kapil Raj's *Relocating Modern Science: Circulation and the Construction of Knowledge in South Asia and Europe, 1650–1900* (Palgrave Macmillan UK, 2007) for the current historiography of *Rangaku/Yōgaku* in the framework of World History.

Raj's writing mainly aims at the history of science, exploring how intellectuals have created knowledge before modern science became dominant. Raj's historiography which has gathered a good deal of attention, is unique and bold, although it seems that this book owes much to a multi-disciplinary approach, especially in the field of social science.

What is remarkable about this book is that Raj attempts to relocate the birthplace of modern science by means of applying terminology, e.g. contact zones, intercultural encounters, and circulation. Despite the scale of challenge, this appears to be successful to a certain extent. Raj's terminology, such as cooperation, go-betweens and circulation in a global sphere, can also be applied to the historiography of *Rangaku/Yōgaku*, in order to put these disciplines in the broader context of World History.

It is also interesting that Raj proposes that each side participating in the process of creating knowledge in contact zones, has equal weight. He also suggests that scientific knowledge is not necessarily defused universally, especially not in the early 19th century. Here, we could re-evaluate the historiography of *Rangaku/Yōgaku*, not just because it converges well with the modernization after the Meiji Restoration, but also because it could create more brand-new contact zones which have not been explored until now.

Raj's versatile and bold writing, therefore, could help us in broadening the

frontiers of the historiography of *Rangaku/Yōgaku*.